ブックレビュー

『トッド人類史入門～西洋の没落』
エマニュエル・トッド　片山杜秀　佐藤　優　著
文藝春秋　刊
定価 935円（本体850円＋税）

トッドの40年以上にわたるライフワークの集大成で型破りの話題作『我々はどこから来て、今どこにいるのか？』（文藝春秋）の解説書と言ってよい。人類の歴史を解明するために独自の家族システム論や人口動態分析を究め、旧来の「西洋中心（至上）主義」の歴史観を鮮やかにでんぐり返す。そのダイナミックな切れ技で近現代史を読み解く展開が斬新だ。長引くウクライナ戦争も含め、本書のキャッチにあるとおり「世界が違って見えてくる！」。

1951年生まれのトッドは、世界でいち早く「ソ連邦崩壊」「米国発の金融危機」「アラブの春」「トランプ勝利」「英国 EU 離脱」などを予言してきたことで知られるフランスの歴史人口学や家族人類学の巨人である。

親子・兄弟関係や内婚・外婚制などで分類した「トッドの家族類型」一覧（19ページ）によれば、世界の国や地域は絶対核家族・平等主義核家族・直系家族・共同体家族・外婚制共同体家族・内婚制共同体家族などに類型化され、「歴史的に最も新しいのは『共同体家族』で、最も原始的なのが『核家族』」と刺激的に解析する。こうした「家族構造」と「政治体制」を関係づけた独自の史的方法論に人口動態分析をクロスさせた注目の「人類史観」が数々の「先見の明」に結びついてきた。

そのエッセンスは、新書版の原点に回帰したという本書の役割に委ねる。５つの構成から成り、「日本から『家族』が消滅する日」「ウクライナ戦争と西洋の没落」「トッドと日本人と人類の謎」「水戸で世界と日本を考える」「第三次世界大戦が始まった」と続く。トッドへのインタビューに加え、思想史研究者の片山杜秀と作家の佐藤優が座談会や対談などで参画し、トッドの史観を解き明かす。やっぱり読書はありがたい。

（山海野（さんかいの）　玄（げん））